The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	心理学から歴史学、さらには哲学へ : ディルタイ中期における「心理学」の哲学的可能性
Author(s)	入江, 祐加
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2020, 54, p. 19-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

心理学から歴史学、さらには哲学へ

――ディルタイ中期における「心理学」の哲学的可能性――

入 江　祐 加

キーワード：心理学／覚知／現象性の命題／ブレスラウ草稿／自己省察

序

ディルタイは、1883 年に『精神科学序説』（以下『序説』と略記）を刊行する。[1] そのなかで彼は、精神科学の基礎づけにおける内的方法を具体化するための第一歩として、「自己省察（Selbstbesinnung）」、およびそこから展開される「心理学」に大きな期待を寄せる。彼は心理学を精神科学の基礎科学とし、心理学的分析なくしては文化の体系や社会の外的組織を洞察することはできないと考える。

彼の「自己省察」および「心理学」は、心的生の現象を自然科学的な因果関係に結びつける従来の心理学の方法を否定することから生まれている。それは、精神科学の基礎づけにおいて人間そのもののあり方を内部から明らかにするための方法論とされている。[2] 本稿の目的は、ディルタイの精神科学の基礎づけにおける方法論の中核部分を明らかにすることであり、具体的に彼の方法論のなかで「自己省察」および「心理学」には哲学的基礎づけ（論理的、方法論的）が必要であるとされている理由を明らかにすることである。

> 意識の事実が全体的に存立している状態や連関をこのように分析すること、諸科学の連関を基礎づけ可能にするこうした分析のことを、自己省察、すなわち認識論に対抗する自己省察と呼ぶことができよう。という

のも自己省察は、意識の事実の連関のうちに思考にとっての基礎ばかりではなく行為にとっての基礎も見いだすからである。この自己省察は、現実的なものについての言明に明証性を与える条件を探究するが、そればかりでなく、感情的生について語らないでいる真理とは違って、意志とその規則とに（特徴的な表現である）正しさを与える諸条件を探究する。こうした条件に、内容や衝動、いやそれどころか感情などのすべてが従うのである。（GS XIX, S.79, 全集Ⅱ, 148頁-149頁[3], 強調は入江）

ディルタイによると自己省察は、この序説の脈絡のなかで、学の組織体系を支えるいわば土台を露呈しなければならない（ebd.）。「自己省察」およびそこから展開される「心理学」は、人間そのもののあり方を内部から客観的に明らかにするものであり、究極的には人生・世界・事物の根源のあり方を理性によって追求し、行為にとっての基礎をも見出す。しかし、ディルタイ中期の心理学的考察、具体的には「ブレスラウ草稿」や「外界の実在性論考」、「生と認識」の考察において、人間そのものの価値や理解の可能性は具体的に考察されないままに終わっている。実際、ディルタイの生涯を通した精神科学の取り組みのなかで、人間そのもののあり方を哲学的に省察することは、「心理学」の枠組みだけでは解決できない問いであったとも考えられ、それが現代の一般的なディルタイ像となっている。

しかし自己省察および心理学を基礎づけることにおいて、ディルタイは個人の問題が内的に省察されるだけでなく、人間全体の問題・人間全体のあり方が可視化されていくことを捉える。こうした心理学的な反省の課題はディルタイの生涯を通して重要視され、心理学の可能性への追求が後期における解釈学や歴史の課題へと敷衍されていく。「人間とは何であるか」という反省的考察がつねに前のめりに展開され深められたことによって、後期の体系的な考察が一定の成功を遂げたのではないか。[4] 本稿は中期の心理学から後期の解釈学および歴史論への移行を「転回（Wende）」と捉える従来のディルタイ像を批判し、中期ディルタイの心理学には「心理学」にとどまらない

学問的可能性があったことと、その学問的可能性は後期の思想につながる萌芽であったことを明らかにする。そのために本稿は、「心理学には哲学的基礎づけ（論理的、方法論的）が必要である」といったディルタイの考えを具体化し、『序説』の全体計画をディルタイが中期の時点でいかに考えていたのかに着目する。特に中期の心理学で行われた認識論的な考察の前段階となる『序説』第四部のための草稿「ブレスラウ草稿」などと『序説』第六部で断片的に叙述される歴史分析との関係に的確に着目することができれば、ディルタイが考える「心理学の拡大化」がいかなるものかを明確化でき、そこからディルタイの精神科学において人間そのもののあり方がいかに経験的に構築されるのかがみえてくるのではないか。[5)]

はじめに概略を書いておく。第一節では、中期の時点でディルタイが構想していた『序説』の全体計画を紹介する。ディルタイが第一部・第二部を第三部・第四部と関連させつつ第五部・第六部へと敷衍し、最終的には歴史や解釈学の枠組みのなかで人間全体のあり方を開示しようとしたことを考察し、心理学の哲学的可能性を考えることが『序説』を書いた当時のディルタイの最大の関心であったことを分析する。第二節では、「ブレスラウ草稿」や「外界の実在性論考」で登場する「覚知」や「現象性の命題」を考察することによって、リアリティーをもった現実を認識していく学の方法論が確立されることを分析する。「他者」や「外界」とどのように関わるかが、自己自身のあり方、人間そのもののあり方を規定することにつながっていくことを具体化する。第三節では、他者・外界を自己との親和性から理解する方法を打ち出す中期の心理学が後期における「追体験」の思想をうちだすための重要な伏線となっていることを分析する。覚知とそれに対応した他者理解とのうちに、人間の所有する唯一の完全なリアリティーが現れ、こうしたリアリティーを捉えることが精神科学の認識論を構築することにつながることを明らかにする。最後に、上記をふまえたうえで、他者の状態を知覚することが他者の状態を理解することへと移行することを『序説』第六部の歴史分析から明らかにし、心理学と歴史学の関係、さらにはそれらと哲学との関係を

分析する（第四節）。

第一節：『精神科学序説』の全体計画

ディルタイは「精神科学」を基礎づけるという課題に生涯を費やした。精神科学とは日本の学問区分では人文科学と社会科学の双方を含む。1883 年に彼は、『序説』第一巻を公刊した。ブレスラウの地においてパウル・ヨルク・フォン・ヴァルテンブル伯（Paul Yorck von Wartenburg）と往復書簡など交流を深めながら思索を深めたこともあって、この著作もヨルク伯に勧められて刊行された。それゆえ『序説』の冒頭には、ヨルク伯への献辞とともに、社会研究と歴史研究の基礎づけの試みを「歴史的理性批判」と名付ける旨が記されている。「歴史的理性批判」は本文中で以下のように定義される。

> ……課題は、まず精神科学を認識論的に基礎づけ、次いで基礎づけのさいに見いだされた補助手段を用いて、個別精神科学の内的連関、それらの精神科学における認識作用にありうる限界、それらの精神科学の真理の相互関係を規定することである。この課題の解決を歴史的理性批判、すなわち人間自身や、また人間によって作られた社会や歴史を認識する人間の能力の批判と名づけることができよう。（GS Ⅰ, S.116, 全集Ⅰ, 124 頁, 下線は入江）

ディルタイの思想形成にはヤーコプ・グリム、ベック、モムゼン、ランケ、トレンデンブルク、リッターなどをはじめとする歴史学派が大きく関わっている。歴史学派とは、フランス革命およびナポレオン戦争後のヨーロッパで徐々に高まっていたロマン主義に出自がある。フランス革命を導いた啓蒙思想の合理主義は自らの行き過ぎを自覚するようになり、また革命に続く恐怖政治により人間が自らを支配できるという信念が試練にかけられるようになった。啓蒙主義のような進歩的な社会が高揚するにつれて、慰めと救済を求める人々に与えるものは少なくなり、その反動からロマン主義運動による

感覚と感情の世界の構築が促された。啓蒙思想は人間の理性・個人の尊重・未来への前進を掲げたが、ロマン主義は人間的・社会的世界は合理的に割り切れるものでなく、時間的流れのなかで生成・発展するプロセスであり、これを有機的全体として歴史の中で捉えなければならないとする。そこから歴史の価値の見直しが始まり、特に科学的な史料批判に基づく学問としての歴史学が要請された。こうした背景から生まれた歴史学派は多様性・個別性・非単線的な発展の中で人間や世界を歴史的コンテクストで捉える思想であり、その方法は何よりも自然主義的な実証主義であった。「この学派には、ある純粋に経験的な考察方法が生きつづけていた。すなわち、歴史的過程の特殊性に愛情込めて没頭することや、個々の事態の価値を発展の連関だけから規定しようとする歴史的考察の普遍的精神が生き続けていた。」（GS Ⅰ, S.XⅥ, 全集Ⅰ, 6 頁）とディルタイは言う。しかし「この学派による歴史的現象の研究と利用には、意識の事実の分析との連関、したがって究極的に確実な唯一の知識に基づく基礎づけ、要するに哲学的基礎づけが欠けていた。〔そこには、〕認識論や心理学との健全な関係が欠けていた。したがって歴史学派は、説明的方法にも到達していなかった」（ebd.）とも言う。「知的発展の歴史は、太陽の明るい光の下で生長する樹木のようなものであり、この樹木の地下の根を探し出すことは、認識論的基礎づけの役割」（GS Ⅰ, S.XX, 全集Ⅰ, 10 頁）であるとたとえる。ディルタイは、歴史学派を踏襲しつつ歴史主義に欠けていた認識論的基礎づけを自ら行おうとする。1883 年に刊行された『序説』第一巻は、こうした歴史的理性批判遂行についてのディルタイの想いを一身に引き受けて、世に出されたものである。

一方、『序説』は、ディルタイの生前には、第一部と第二部からなる「第一巻」しか刊行されず、それは「序説」のさらなる「序説」というものにとどまっていた。「第一巻」を執筆することと並行して、ディルタイは「第二巻」の構想を計画する。「第二巻」は生前には公刊されず、草稿ないし完成稿や講義録、書簡という形で現代に残されている。重要なのは、その草稿・遺稿群にディルタイ自身の未完成の主著としての『序説』の全体像の計画が

載せられていることである。この「第二巻」のための草稿および遺稿群に依拠してヨーアハおよびローディが編纂した『序説』全体の構成を示した概要表が以下である。

第一部：基礎づけの学を必要とすることが明らかな、精神の個別諸科学が織りなす連関の概観
第二部：精神諸科学の基礎としての形而上学。その支配と衰退
〔註：以上が生前公刊された第一巻〕
第三部：経験諸科学および認識論の段階。精神諸科学の今日的問題
第四部：認識の基礎づけ
第五部：思考とその法則および形式。現実へのこれらの関係
第六部：精神的現実の認識、および精神の諸科学の連関[6)]

ここから分かるように、生前に公刊された「第一巻」は『序説』全体の第一部、第二部を構成しており、「第一巻」は第三部以降へと敷衍していくための予備的研究である。この全体計画を詳しくみていこう。「第一巻」の第一部で、ディルタイは精神科学の試みを「生を生そのものから理解する」こととし、精神科学において人間が考察の主体でありかつ客体である二重性を構造として取り出す。精神科学は完全に主体から切り離された対象を問題としているわけでもないし、人間の外にある自然のごく限られた領域を問題にしているわけでもない。「第一巻」第一部において、ディルタイは人間の内的経験のあり方を度外視して、人間自身やまた人間によって作られた社会や歴史を認識する人間の能力の批判（「歴史的理性批判」）を遂行することはできないと考え、人間そのものの経験を内的に追っていくことのなかから基礎づけの仕事そのものを洗練させていく基本的な考え方を明確化する。

また、「第一巻」第二部において、ディルタイは形而上学の歴史的な影響力を分析する一方で、形而上学は歴史的に限定された現象にすぎないとして批判する。そして「精神領域の形而上学を分析的研究によって駆逐した精神

科学は、その分析の出発点と終着点である人間のうちに新しい形而上学への入り口を見出すであろうか。それとも、精神的事実の形而上学は、どの形式でも不可能になったのであろうか」（GS Ⅰ, S.384, 全集Ⅰ, 389 頁, 強調は入江）と問う。形而上学への批判とともに、現在の哲学が行わなければならない仕事が規定される。これらの考察は、第三部以降の精神科学の認識論の構築と密接に関係していくものであり、ディルタイは「第一巻」第二部をふまえたうえで、哲学が行わなければならない仕事を規定しようとする。哲学が行わなければならない仕事とは形而上学とは異なる方法でこれまでよりも高次の段階に達することであり、哲学は人間の生のあり方に適合した形で構築され、人間の歴史的過程のすべてを自らのなかに含みこみながら発展する。第二部において、形而上学の試みとは対置される形で、彼自身の精神科学の試みが明確化される礎が築かれる。

第三部では、1893 年頃の執筆と推定される「ベルリン草稿」第三部と並んで、「15、16 世紀における人間把握と分析」（1891/92 年）、「17 世紀における精神諸科学の自然体系」（1892/93 年）、「17 世紀における思考の自律、構成的合理主義、汎神論的一元論、およびその連関」（1893 年）、および人間の分析の標題下に集められた、歴史的人間学に関する諸論考が軒を連ねている。これらのなかでディルタイは第二部末尾で述べた近代学問的意識の歴史についての叙述をさらに展開させており、[7] これらを通底する課題は「人間の把握」ないし「人間学」であるかのようにみえる。それに関して大石は、これらは第一部に直結する「精神科学の今日的状況」を言い表す課題にすぎず、ここから広義の「人間学（Anthropologie）」の構想を読み取るのはまだ早計であると述べている。[8] 確かに第三部では、「人間学」という言葉が表れているが、その人間学の考察は断片的な考察にとどまっている。人間学の考察は歴史が扱われる第六部までの課題を分析したうえで具体化されるべきである。

第四部では「外界の実在性についてのわれわれの信念の起源とその信念の正当性とに関する問いを解決することへの寄与」（以下「外界の実在性論考

と略記）（1890 年）や「記述的分析的心理学についての理念」（1894 年）などの論考が軒を連ねている。ここで重要なことは、1883 年に『精神科学序説』の第一巻が公刊されたとき、第四部の草稿はほとんど完成していたということである。その主要な部分は「ブレスラウ草稿」と呼ばれ、そこでの課題は、意識のなかにある本来の現実性を取り戻すと同時に、人間の意識の表象以上のものである世界への通路を人間自身に与えることである。実際、第四部の大部分は、「意識」のあり方と範囲の現象学的な考察にあてられ、このなかでディルタイは、「覚知」、「自己省察」、「知覚」、「経験」、「気づき」、「表象作用」、「注意」、「自己観察」などの働きに言及している。

第四部においてディルタイは、人間の内的知覚と思考を抽象的な知性としてではなく、感情や意欲と構造連関を形成する立体的な知性として分析する。第四部の考察は、端的に言うとディルタイ中期の心理学的基礎づけの前段階である。こうした考察が第五部、第六部へと敷衍されることによって、彼の学の構想が徐々に体系化される。

こうした全体計画から分かることは、精神科学の基礎づけが目指す最終的な到達点である。彼は、まず、第一部・第二部を第三部・第四部と密接に関連させ、それを第五部・第六部へと敷衍させたうえで、最終的には歴史や解釈学の枠組みのなかで人間全体のあり方を開示することを目指していた。特に、第四部の心理学は第五部第六部の社会や歴史の考察と関連していくのであり、最終的にそれらは人間全体のあり方を客観的－総体的に捉える哲学を構築していく。心理学の哲学的可能性を考察することが、この全体計画を書いた当初の彼自身の最大のテーマであったことがこの目次からうかがえる。こうした彼自身の目標を的確に捉えるために、本稿は「ブレスラウ草稿」および「外界の実在性論考」「生と認識」を具体的－個別にみていく。

第二節：自己の生を映し出す鏡としての覚知

「第一巻」第一部においてディルタイは、「われわれは、社会の体系を構成している状態や力を自分自身のうちに最も生き生きとした活動状態のなかで

内側から理解する」と述べていた（GS Ⅰ, S.36f. 全集Ⅰ, 45 頁）。「内的方法」は、精神科学の基礎づけの重要な方法論になっている。前節でも述べたように第一部、第二部は第三部、第四部へと敷衍されていく。特に第四部では、それまでで考察された内的方法の考え方がさらに明確化され、人間の経験や意識の全体を認識する際に、経験の原初状態をありのままに捉える「覚知（Innewerden）」と呼ばれる方法が採用される。ディルタイにおいて「覚知」は、確固たる客観の出現に結びつくものとして考察される。[9] 重要なことは、覚知において、その客観の出現は主観との関係のうちに捉えられるということである。

「覚知」を考察することにおいて、ディルタイは、カントと共通する認識論的関心を抱きながらも、カントの「硬直し死んだ」アプリオリと訣別することを目指す。彼は意識の現実条件と前提を人間の生きた歴史的プロセスに置く。覚知は、精神科学において人間の生きた歴史的プロセスを捉えるための認識論的方法である。ディルタイの挙げる例に従うと、私が目の前の舞台で、フィリピの戦いの前にユリウス・カエサルの亡霊がテントにいるブルータスのところに出てくるのを見ているとき、私にとって存在しているのは、このテントや、そのなかで疲れてうとうとしながら読書しているブルータスや、ほの暗く灯る明かりや、暗殺された者の恐ろしい出現以外の何ものでもない。私の自己は、この瞬間にこのような知覚状態に関していわば消されてしまう。すなわち、外界の全光景は、そこで実演しているさまざまな個人ならびに客観はすべて残らず知覚過程のうちで私にとって存在しているがゆえに私の意識の事実なのである（vgl.GS Ⅹ Ⅸ, S.60-61, 全集Ⅱ, 125 頁）。

ここから分かるのは、あらゆる客観の存在やリアリティ（実在）は私にとって現に存在するのであって、主観と客観は互いに区別されながらも相互に関係づけられているということである。私が過程そのもののうちで体験するのはこの関係をひとつの全体に統合したものである。心の働きの存在とその働きについての知識とは決して二様の別事ではない（vgl.GS Ⅹ Ⅸ, S.63, 全集Ⅱ, 128 頁）。認められる対象とそれを認める眼とのあいだには区別がない。

実際、私が知っているものはまさしくひとつの意識の事実に他ならない。心の働きがあるのは私がそれを体験するからである（ebd.）。

> だが、この自己－自身を－見いだすことの内部にとどまるとすれば、自分を－感ずること、自分を－感得すること、自分が－触発されているのに－気づくこと――お望みのように表現したらいい――が、客観を向き合わせて措定することの条件となってくる。（GS XIX, S.70, 全集Ⅱ, 137頁）

さらに1900年の『外界の実在性論考』では、「現象性の命題」や「生の総体性」や「自己省察」や「覚知」の概念がより体系化されて述べられている。そこでは自分自身の価値、自分自身の知の客観性が、「外界」や「他者」のリアリティーを捉えることを通して形作られることが考察されている。

> ……他者と感情をともにすることによって、同時に、そのひとの核となるような価値に満ちた存在を確信し、そしてそのひとの自立を尊重する一方でそのひととの類縁性と連帯を意識するようになるのである。したがって、私自身を他の人々から区別することは、私の意志が、私の意志から分離されて自立している意志、しかし私の意志と同質で類縁の意志へ関係するという、特別な関係を含んでいる。これによって、外界の本性、つまり意識において生じる自己と他者との分離の本性は、いっそう特徴づけられる。これと一致するもう一つの特徴づけがある。それは、自分自身の感情が他の人格によって共有されたいという欲求であり、自分自身の知が普遍妥当性をもっているということが確証されたいという欲求であり、自分自身の価値が敬意をもって承認されたいという欲求である。（GS V, S.112, 全集Ⅲ, 504-505頁）[10)]

『外界の実在性論考』のなかでディルタイは、他者・外界の存在を「抵抗（Widerstand）」という言葉で説明する。そのなかでディルタイは他者・外界

の存在を「抵抗」として確証させることを試みる。彼によると、人間の存在は決して自分から規定されるのではなく、逆に世界の方から規定される。「他者」や「外界」は、決して「私」の思い通りになるものではなく、思い通りにならないものとして現れるがゆえに、ここで世界のあり方が「抵抗」と呼ばれている。私に対置する他者・外界は、私と同じように独自の意志をもっており、私は抵抗を通してさまざまな他者たちと一緒に共同体を作っていく。抵抗として現れる「他者」や「外界」とどのように関わるかが、自己自身のあり方、人間そのもののあり方を規定しているのである。

> 自己と客観は意識の内部で区分され、いわば卵割がなされるが、ほかならぬこの同じ営みによって、自己が限界づけられると同時に、像が外部のものとして客観化される。じっさい、われわれにとって自己が存在するのは、自己が外界から区別される場合だけである。外界という語が意味をもつのも、それが自己から分離される場合だけである。（GS V, S.124, 全集Ⅲ, 517-518頁）

「ブレスラウ草稿」、『外界の実在性論考』においてディルタイは、彼なりの主観と客観の関係を体系化した。ここで、「我」に「汝」や「それ」が対立するということは、我に対立する独立のものが、我の意志によって経験されるということを意味している。『序説』第四部を形成する予定だった草稿において、こうした二つの自立したものが、切り離されると同時に密接に関係づけられて綿密に考察されている。ここでディルタイが示そうとしていることは、精神科学の認識において「客観性（Objektivität）」という概念は決して「主観性（Subjektivität）」と対置される概念ではなく、互いに結びつく概念であるということである。「抵抗」として提示する他者や外界は、人間が自己の生を深く具体的に映し出すための鏡である。その鏡は主観そのものに作用する媒体であると同時に、その鏡を通して主観そのものが世界に働きかける。

こうした知覚の働きを考察する心理学的－認識論的な考察が、いかにして世界および現実を具体化することに結びついていくのかは、第五部、第六部でさらに問われることとなる。第四部の心理学的考察は最終的には歴史学の構築に結びついていくが、それらが結びつくことにおいて人間そのもののあり方が内部から客観化される。そこにおいて精神科学の基礎づけがいかなる哲学的意味をもつかがみえてくる。

第三節：体験をよみがえらせる認識作用としての覚知

前節で述べたように、私の目の前にある精神的なもの（Objekt）――それは私が自己自身を理解するための手段であり、私が自己自身を内部から理解するための道具（Organ）である。こうした客観を主観そのものとの関係のもとで分析することにより、自己の周りにあるさまざまな協働が精神科学のなかに反映される。

> 樹木が私の前に立っているとしよう。この樹木は、さまざまな部分が一つの全体にまとめ合わされた生の連関である。その樹木が抵抗として立ち現われる経験が無数になければ、その樹木はわれわれにとっては、たんなる知覚像、影や書き割りの絵であるだろう。また、どのような漠然とした場所も、われわれがそこに足を踏み入れ、われわれの手が対象に触り、対象の距離の抵抗が克服され、その果実を味わうことなどがわれわれを喜ばせる程度に応じて、われわれにとって実在性をもつ。それゆえ、このように、地面・樹木・水・芝生などから、生の全体の相貌がかいま見える。（GS X IX, S.356, 全集Ⅲ, 590 頁）

樹木はひとつの全体を形成する。たとえば、人間は木の内に形成力を追感し、その形成力は木の果実、その影、その花の香り、花の素晴らしさを人間自身に贈る。その葉・枝・幹・根が機能的な諸部分からなる連関を形成する。木もまたひとつの構造をもち、その構造を媒介にして、木は生き、その

環境との生き生きとした関係をもつ。樹木は、いたるところですべての部分とそれら同士の連関の内にある。そこには意識された生の統一体において触発されることとそれに対する反作用とが体験されており、その体験において私と樹木は現に存在する。

ここで、私と樹木の関係は、作用－反作用の関係のもとで捉えられ、力学の法則のもとでは、地面に接している物体と地面そのものの関係と同様である。私と物体とのあいだには、私が物体に働きかけている力と物体が私に働きかけている力がともに存在する。ここで他者なき自我、内的なものなき外的なものというのは無意味な言葉である（vgl.GS XIX, S.338, 全集Ⅲ, 566頁）。他者が経験されるのは、人間が他の人間と親和的であるということに基づいている。事実、ディルタイ後期の解釈学は、他者・外界を自己とのこうした親和性から理解する方法を打ち出すものであった。中期の心理学的な考察は、彼が後期における「追体験（Nacherleben）」の思想を打ち出すための重要な伏線となっている。

> われわれは動物をわれわれの手段であるとみなす。それにもかかわらず、動物がそれ自身のために生きており、動物にも満足感と生の充足の中でその生存に固有の価値が与えられていることを、われわれは知っている。人間は、彼の周囲にある山や川に対してさえ、外的目的論という考察法を拡張し、その主人として、山や川を支配下においている。そしてそれにもかかわらず、人間の内にある次のような感情は抹殺することができず、その感情がすべての新しい文学において再び新たに力強く芽生えている。すなわち、このどっしりとしたゴットハルト山は、それ自身の内に安らぎ、それ自身で存立しており、その存在の毅然とし断固とした力が、ともかくまさにそれ自身のために、すなわち私の中でそれ自身のためにある、という感情である。われわれは、われわれがそれを切り拓き、あるいは踏破するために山がそこにあるのだと自惚れる。このようなわれわれは、なんと矮小な人間なのであろうか。（GS XIX, S.377f.

全集Ⅲ, 619頁)。

ここで重要なことは、ディルタイが「覚知」の例として、カエサルの劇やゴットハルト山を観ることを挙げていることである。演劇の鑑賞において、観客は舞台や俳優の存在にひとつの一体感を感じ、その一体感のなかで観客は劇の筋や登場人物の個性をリアリティーとともに理解する。この客観は確かに目の前にある対象を本質的に知覚したものであるが、ディルタイがこうした意識の本質構造を「超越論的主観」と区別することには理由がある。というのは、その客観を捉えることにおいて、観客は自分自身の体験をそこに重ね合わせて理解しているからである。実際そうすることにおいて、観客は登場人物の体験を自分のことのように捉え、涙を流したり笑ったりしているのである。俳優や劇および文学や詩で登場する自然は、ただそこに無機質にあるのではなく、人間自身の体験を生き生きと蘇らせるものとしてそこにある。実際、ゴットハルト山は、自然科学的にみれば、アルプス地方にある山であり、雪や雲に覆われ、険しい岩々から成っている。しかし1784年にゲーテがその自然を「君よ知るや、かの山と雲のかけ橋を？」と詠って以来、その自然は当時の若者の孤独や憧れを投影するものに変換され、単なる険しい山以上の意味合いをもつようになった。覚知は客観を捉えることにおいて、個々の人間の経験それぞれを交差させながら生き生きとしたものとして蘇らせる。こうした覚知とそれに対応した他者理解とのうちに、人間の所有する唯一の完全なリアリティーが現れてくる。そしてこのことが精神科学の認識論の最初の重要な部分になることをディルタイは捉えようとする。

同じ現実、同じ生を詩人や預言者や哲学者は解釈しようとし、理解しようとする。というのは、この現実は思考に適合しており、われわれの思考にとって近づきうるからである。[11] 現実というのは生動的であるからこそ有意味なのだが、それと同時にまったく究め尽くしがたい。生はこのように究め尽くしがたいので、比喩的な言葉でしか表現できないと

いうことになる。この点を認識すること、この点をその根拠から明らかにすること、ここからの帰結を説明すること、それが哲学の始まりである。（GS X IX, S.307, 全集 II , 441 頁 -442 頁）

第四節：心理学から歴史学、さらには哲学へ
――『序説』第六部の理性批判――

最初の覚知の過程は、ある内的な状態をある人物の外的な知覚像と結びつけることであった。その過程をふまえたうえで、ある内的状態に目を向けるときに、何かぼんやりとした仕方ではあるが、心的生の全体の構造が捉えられることが考察される。

『序説』第六部において他者の状態を知覚する（Wahrnehmen）ことが、他者の状態を理解する（Verstehen）ことへと移行することをディルタイは捉える（vgl.GS X IX, S.277, 全集 II , 399 頁）。「理解」とは、ディルタイによると、ある心の状態をその環境を条件にして心的生の全体から解釈する（Deutung）ことである（ebd.）。理解するということは精神的状態に携わる者の仕事である。それは生動性（Lebendigkeit）への順応として捉えられ、説明（Erklären）とは区別される。あらゆる内面は、私の生動性に与えられている。あらゆる内面は力として存在する。それは私の存在を制限する一つの力である。外的自然の場合にあらゆる過程が圧迫や衝撃や刺激によって条件づけられており、これらがその過程のなかで作用し続けるように、力はつねに作用し、働いている（ebd.）。

精神的世界をつくり上げている意識の事実は、人間自身に与えられているままに存在している。それゆえ人間のあらゆる内面の全体を捉えることが、精神科学の完全で客観的なリアリティーを捉えることと結びついていく。人間には個々の主観およびそれらの主観が相互に作用し合う過程、さらに主観の生の統一やその性質やその行為その他との関係が与えられており、精神科学における論理的形式や論理的法則は、覚知することや意識の事実を突き合わせることにまで遡るような働きの多様な組み合わせによって生じている。

いまや、人間は、自分の歴史を振り返ってみることで、自分自身を対象化する。確かに心理学と歴史学はまったく違うものであるとはいえない。歴史とは、おのれの内面に言葉を与え、その内面を語ったり説明したりする最も有力な補助手段であるからである。確かに、人間がおのれのなかに見いだすものを、彼はまず最初に歴史に照らして見てとることができる。歴史は人間のうちにあるすべてを明るみに出し、はっきりと気づかせてくれる。

第六部の「自己省察と歴史的理解」、「理解すること」、「歴史的意識」、「生の連関における価値の成立」、「歴史と人間本性」、「歴史的な生動性を捉えること」、「歴史的分析」、「歴史」、「実質的な自由」、「人間本性の歴史的展開」、「人類の教育」などの節において、内的経験と人間の本質という最も深みのある点が問題となる。そこにおいて自己省察、覚知、心理学の捉える領域はディルタイのなかで拡大する。そこで考察された生き生きとした生動性と自由は、その認識のなかでみられる主観性の活動である。精神科学の理解は覚知されたものではあるけれども、主観的である。精神科学において「客観性（Objektivität）」とは、対象や現象の本質的な点を言い表すと同時に、主観そのもののリアリティーとして捉えられねばならない。精神科学の理解とは、われわれにあって源泉となるもの、つまり現実をとらえることである。

『序説』第四部から第六部にかけて自己省察、覚知、心理学の領域の拡大化が実現し、おのれの内面を明らかにすることが人間そのもののあり方を内部から構築することと結びつくことが明らかとなる。人間の内的経験の全体を捉えることにおいて、人間そのものの最も普遍的な特性が捉えられる。

こうした考察から、ディルタイの「哲学」の出発点が規定される。「哲学」は、超越的なものを一切推定することなしに、生をありのままに示すことから始められる。宇宙の思考適合性（Gedankenmäßigkeit）を示す星辰の無限の空間に向けられた眼差しと並んで、自身の心情の深みに向けられた眼差しが存在している。内的経験やこれに関する省察とともに発展してきた人間の思想や歴史に深く入り込んでいくとともに、分析がどれほど確実に真理へと迫ることができるかが問われている。オリエントの遊牧民が星を仰ぎ、オ

リエントの神殿の天文台で神官が星の礼拝と星の観察とを結びつけた時代以来、人間が長い歴史を通して抱き続けてきた感情が、人間の意識のなかで、神の信仰の心理学的起源といたるところで絡み合っている。これらすべては、ひとつの気分（eine Stimmung）のなかで結び合わされ、魂は拡大され、思考に適合した神的連関がひとつの心理学のなかで果てしなく広がっている。このようにして人間は世界のうちに、自然科学の思考からはみ出る崇高な意味を見出していく。ディルタイの精神科学はこうしたものをも捉えていく。

こうして人間の本質を哲学的に問おうとすることは、その進路の終着点で把握する主体をその対象とする認識論と出会う。それがディルタイの自己省察および心理学である。哲学が思考可能性について決定を下し、このひそかに働く力が、彼に自己自身の巨大な空想的反映へと世界を作り変えたとき、その哲学者の思考を導いているのは自己自身の心像であった。哲学は自己省察および心理学とともに経験的な学となる。もしも、こうした中期の自己省察および心理学の基礎づけが遂行されていなかったとしたら、ディルタイは精神科学の基礎づけが最終的に到達する哲学の入り口を見出せないままに終わっていたし、その際の精神科学は事実を証明することはできても、人間のあるべき姿を哲学として人間自身に開示することは目標にできないままに終わっているだろう。

結語

本文でも述べたように、中期の心理学において人間の内的経験の分析から、変転する人間の生におけるひとつの普遍的精神の結びつきを分析したディルタイの仕事は、後期において解釈学および歴史考察に移行した。ディルタイは以下のように考えている。生は、生動性と同時に法則、合理性、恣意を示し、つねに新たな側面を現わし、個々の場合には明らかなことがあるかもしれないが、全体としてはまったく謎である（vgl.GSⅧ, S.80, 全集Ⅳ,

492 頁)。こうした生の謎を直視しながら、中期の考察は、ディルタイ自身の一貫した態度を呼び起こす重要な伏線となっていた。その態度とは、社会や歴史のなかに埋没している人間自身を反省的に捉えようとする態度であり、生そのもののなかにひとつの目的を経験的に探し出す態度であった。最晩年の『精神科学における歴史的世界の構築』のなかで、ディルタイは「作用連関」の概念を深化させたうえで、ヨーロッパの歴史を実証的に記述する一方、歴史的世界を諸目的によって充たされた世界とみて、歴史の進行にひとつの意味を与えることを試みる。このような歴史のなかで変化していく人間の過程のなかにひとつの目的を内的に見出そうする後期の体系的な立場は、中期の自己省察および心理学の考察を通して徐々に確立されていったのである。

他方で、中期の心理学における「覚知」や「現象性の命題」がすぐ直接的に解釈学や歴史の考察に結びつくわけではなかった。本稿の考察のなかでその展開のあり方を「心理学の拡大化」という言葉で説明した。確かに両者の段階において量的な拡大化は存在していた。拡大化は彼の考察が解釈学や歴史考察へとつながっていくための重要な手がかりとなっていた。しかし、それぞれの段階における心理学的反省のあり方には質的な違いもある。この質的な違いを無視して中期と後期はつながっていると単純に考察するならば、それは極めて雑な分析にしかならないものと危惧される。

ディルタイは、「同じ現実、同じ生を詩人や預言者や哲学者は解釈しようとし、理解しようとする。というのは、この現実は思考に適合しており、われわれの思考にとって近づきうるからである」(GS X Ⅸ, S.307, 全集Ⅱ, 441 頁 -442 頁 , 本稿第三節参照) と述べており、自らの目的が一貫して現実の本質を捉えることであると明言していた。彼は内的方法からいかにして人間の本質に近づいていくかを考え、内的方法から「哲学」のあり方をも具体化しようとしていた (本稿第四節参照)。ローディもこの引用に際して、理解の課題は無限な課題であり、常に近似的にしか導きえないと述べており、目標に向けて絶え間なく試行錯誤しながら自らのあり方を磨き上げることが

ディルタイの思想の独自性であるとしていた（本稿註 11 参照）。こうした考察から、省察にとって近づきうるもの、すなわち、経験可能なものにいかに専心し、手引きするかをディルタイが生涯を通して考え抜こうとしていたことが見えてくる。しかし「近づきうる（zugänglich）」と言っても、その zugänglich は各時期ごとに試行錯誤され、その都度練り上げられている。各時期ごとに zugänglich のあり方に差異があること、すなわち中期と後期のあいだに転回があることが、半世紀にわたって展開されたディルタイの思想の厚みではないかと考えられる。その紆余曲折を単に「近づきうる」として片付けるのは彼の思想を単純化させることにつながるのではないか。中期の心理学と後期の解釈学・歴史論が同じ目的をもって、同じところに近づいているとしても、半世紀にわたる研究のなかでさまざまな方法を試み、さまざまな分野の著作を生み出したディルタイの試行がこの一言で単純に説明されるわけがないからである。

本稿では、ディルタイの生涯にわたる探求の質的な差異を十分に考察できたとは言いがたい。しかし本稿の考察で明らかになったことは、現実をありのままに捉えたいという飽くなき追求心が、後期の解釈学・歴史論の転回を導いたという事実である。ディルタイが精神科学の基礎づけにおいて最終的に捉えようとしていたものは、想像や虚構や可能性ではなく、現に成り立っている状態や現に存在し活動するものであった。こうした現実への飽くなき追求心が、彼の精神科学の探求方法を深化させると同時に変化させていったのである。

中期から後期にかけて、こうした現実を捉えるために考察されてきた「内的方法」がそれまでには見られないような多くの役割を担うようになっていた。さらにディルタイ自身が捉えようとする「現実」の内容も徐々に深まっていった。中期の心理学における省察では、個々の主観や客観、個々の生動性を記述し、それらの内的な結びつきを把握することのなかで「人間」そのものが捉えられたにすぎなかった。本稿で考察したカエサルの劇やゴットハルト山の例でディルタイが捉えようとしていたものも、内的結びつきのな

かから明らかにされる人間の現象のひとつであり、人間の本質を考察するものではなかった。中期の心理学は、直接に感覚する経験を対象とし、自己の内的な観察を極度に純化させることで、人間のあり方に近づこうとしていたが、こうして捉えられる人間像は自然科学的な人間像にとどまっていた。中期の心理学で叙述された個々の方法論は「何が原因で、どのように」という叙述にとどまっており、人間そのもののあり方を「なぜ、何のために」と考察することはしていなかったのである。しかし、後期のディルタイは人間の存在に意義や意味を与えるものを具体的に考えていた。そこで彼が考えることは、現実が人間にとってどのような意味をもつかであり、人間そのもののあり方や生き方に現実がどのような影響を及ぼすかということである。彼の探求は歴史や社会のなかにある相対性を乗り越え、精神科学という客観的な「学」を構築するなかで、人間の目的を明らかにすることを目的としていく。後期のディルタイは中期以上に、「客観的な」人間像を探究しようとし、その際に絶対的な存在や信仰の妥当性をも根拠づけようとする。中期と後期のうちには確かに質的な転回がある。そして、こうした考察からさらに取り組まねばならない課題が浮かび上がる。その課題とは、ディルタイ自身が生涯にわたって遂行した zugänglich が、心理学から解釈学・歴史論に至る思想の「転回」を導いたということと、探求そのものが量的に拡大していったことが探求の質的変化をもたらしたということをさらに考察することである。[12)]

ローディは、ディルタイにおいて、思想と現実が中期においても後期においても、相互に「近づきうるもの」とだけ規定されていると理解している。確かにこうした連続性はディルタイのなかに見られるが、一方でそこにある質的差異も決して見逃されてはならない。その質的差異を見逃さないことが彼の精神科学の試みを哲学的に意義づけ、ディルタイ哲学によって人間のあり方に切り込んでいくことを可能にする。ディルタイの心理学が当初から現実そのものを探求しながら zugänglich を捉えようとしていたことからも、その質的転回を彼の最終的な精神科学の目標と結びつけて明確化させることが、その哲学の解釈のために重要な態度ではないかと考えられる。

［註］

1） 一般に、ディルタイの思想は、初期（大学進学の 1852 ～ 76 年）、中期（1877 ～ 96 年）、後期（1897 ～没年の 1911 年）という三段階に区分されている。前期は、神学の枠を越え歴史へと研究対象を広げていった彼の思想の自覚期である。中期は前期の思想を発展させながらその基礎づけの方法を心理学に託した時期である。後期は、歴史への反省を通して精神の自己知を完成させた時期である。詳細は鏑木政彦『ヴィルヘルム・ディルタイ――精神科学の生成と歴史的啓蒙の政治学――』、九州大学出版会、2002 年、10 頁 -14 頁。

2） 実際、マテウッチはディルタイの心理学を「心理学的人間学（Psycho-Anthropologie）」と捉えている。Vgl.Matteucci, G.: *Dilthey, Das Ästhetische als Relation*, Königshausen & Neumann, 2004, S.95.

3） 凡例として『ディルタイ著作集』（Dilthey,: Gesammelte Schriften, Vandenhoeck und Ruprecht, 1913-2006）からの引用箇所や参照箇所の指示にさいしては、巻数をローマ数字で、頁数をローマ数字あるいはアラビア数字で表わし、（　）に入れて本文中に示す。さらにドイツ語の引用箇所のあとに邦訳のページ数を付す。翻訳は法政大学出版局『ディルタイ全集』全 11 巻を参考にし、必要に応じて入江が改訳した。

4） ディルタイの思想は『記述的分析的心理学についての理念』を境に心理学から解釈学へと転回したという理解が一般的であり、ディルタイ晩年の思想を示す『精神科学における歴史的世界の構築』は中期の論文と比較していかなる転換を示したのかが論議されてきた。ミッシュ、グレートゥイゼンといったディルタイの弟子は、『記述的分析的心理学についての理念』を境として、中期の心理学から後期の解釈学への転回を強調した。しかし遺稿が公刊されてからの研究動向、たとえばその発端となる Kühne-Bertram（Hg.）: *Dilthey und die hermeneutische Wende in der Philosophie* のなかでは以下のことが述べられている。すなわち『記述的分析的心理学についての理念』は表現のカテゴリーの開始によって、すでに解釈学への基礎を発見している。そこでの中心的なディルタイの動機は、至るところに連関を探し求めることであり、それが心理学を構成するための記述と解釈学の表現への教説をひとつの衝動の二つの側面として開示させている。（Vgl.Kühne-Bertram,: *Dilthey und die hermeneutische Wende in der Philosophie*, Vandenhoeck & Ruprecht, 2008, S.10.）こうした先行研究をふまえたうえで、本稿はディルタイの中期から後期に至る変化を「転回」とみなす見方を批判し、後期における精神の客観態への接近と歴史の意味内容の開示が、中期の心理学における人間精神の反省という課題を拡張化させ深化させたものであることを分析する。

5） 上記の註と関連して、後期のディルタイが解釈学へ重心を移しても、心理学的観

点は見失われたわけではないということはいくつかの先行研究で指摘されている。たとえば、ホッジスやアーマスがそのことを論じている。Vgl. Hodges, H.A.: *The Philosophy of Wilhelm Dilthey*, 1952, Routledge. Ermarth, M.: *Wilhelm Dilthey: The Critique of Historical Reason*, 1978, Chicago U.P. 特にマックリールの Makkreel, R-A.: *Dilthey. Philosopher of the Human Studies*, Princeton University Press, 1975 はディルタイ初期の心理学的著作を彼の後期の解釈学的著作から切り離そうとするこれまでの傾向に逆らって、彼の著作の本質的連続を示そうとしている。マックリールはディルタイの美学的著作の重要性に着目し、美学的著作の哲学的意味をカント的な意味と結びつける。本稿の考察はマックリールの自己省察や心理学の考察から多くのことを踏襲しているが、美学については除外し、認識論的な反省を通して人間そのもののあり方の構築が目指されることを考察し、そのことを通してディルタイの心理学と歴史学が結びつくことを考察する。

6) これとは別に「ベルリン草稿」に載せられた全体計画については以下を参照。XIX 448-450. Vgl. Johach, H.: *Handelnder Mensch und objektiver Geist. Zur Theorie der Geistes- und Sozialwissenschaften bei Wilhelm Dilthey*, Meisenhaim/G. 1975, S.90, Anm. 163.『全集』XIX巻の編集者たちは 1893 年頃と推定される後の「ベルリン草稿」もXIX巻に含めた。

7) 具体的には、そこでマキャベリやブルーノ、ルター、カルヴァン、コールンヘルトなどが精神科学の通史のなかで細やかに叙述される。

8) 大石学「ブレスラウからベルリンへ――〈精神諸科学の基礎づけ〉構想の展開をめぐって」、『ディルタイ研究』第30号、2019年、所収25頁、44頁、29頁-31頁参照。

9) ここで確固たる客観を規定するとはいっても、その客観の捉え方はカント的な対象を主観の前に定立させて表す客観の捉え方とは大きく異なるものである。ディルタイの直系であるボルノーは、精神諸科学の普遍妥当性を自然科学の延長で考えるのは不適切であり、その厳密さを論証することは実現不可能であると主張し、普遍妥当性の内実においてカントとの差異を考察する。(Bollnow, O-F.: *Studien zur Hermeneutik Volume I: Zur Philosophie der Geisteswissenschaften*, Alber, Freiburg/München, 1982.(以下 SH と略記)。そこからボルノーは精神科学の目指すべき認識において「普遍性(Allgemeinheit)」、「普遍妥当性(Allgemeingültig)」ではなく、「客観性(Objektivität)」という呼称を用いることを推奨する。「客観性」とは「ある認識がその対象に相応していること」(SH, S.24)であり、「さまざまな事物そのものとの交わりのなかではじめて生じる」(SH, S.25)。「真の解釈は、その対象を提示し、現実を開示し、この対象との絶えず新たな出会いのなかでますます大きな豊かさを解明する」(SH, S.26)。ボルノーの考察は、精神科学の目指すべき認識が、カント的な自然科学の普遍妥当性への問いとは異なることを具体的に分析するものである。

10）この引用はフィヒテの認識論を評価する文脈で述べられているが、ディルタイ自身の考えでもある。

11）ローディは、「ディルタイ、ガーダマーと『伝統的』解釈学」大野篤一郎訳、『思想』、716号、1984、2月、24頁-35頁のなかでディルタイのこの箇所を引用し、ここからディルタイの思想の独自性を考察する。彼はこの引用の「近づく（zugänglich）」などの言葉を解釈することを通してガーダマーの『真理と方法』のディルタイ批判を再批判することに成功している。

「……彼が、生の究め難さが設ける限界に、理解の課題も個々の点では結びつけられていることを弁えているということによって、彼の解釈学理論の穏健さが際立たされている。このことは、ディルタイに初めて帰せられるべき新しさではなくて、理解の課題は無限な課題であり、常に近似的（approximativ）にしか導きえないという、シュライエルマッハーに遡る見解である。」（同32頁）疑いもなくシュライエルマッハー、ディルタイなど彼らの念頭にあった客観性の理想は、「理解という課題を完全に解決することへの要求よりは、むしろ歴史的現実に弛まず接近すべしという要請を内容として含んでいたのである」（同32頁）とローディは述べる。この箇所はディルタイの真理観の独自性が端的に表されている箇所であり、極めて重要な箇所である。

12）心理学から歴史学へ、さらには哲学へと探求が量的に拡大されていったからこそ、量的拡大と質的差異を繊細に捉えられない門外漢のエビングハウスの批判がディルタイを悩ませたのではないか。これについてはさらなる考察が必要である。

（大学院博士後期課程単位修得退学）

Zusammenfassung

Von „Psychologie“ bis zu „Geschichte“, noch bis zu „Philosophie“: die philosophischen Möglichkeiten der mittelfristigen „psychologischen“ Betrachtungen von Dilthey

Yuka Irie

Wilhelm Dilthey war ein Philosoph, der auf das Leben Gewicht legte und zugleich die Grundlegung für das Studium der Geisteswissenschaften zu seiner Lebensaufgabe machte. Dilthey versuchte durch die Beschreibung der jeweils einzelnen Lebendigkeit zu vollendeter Deutlichkeit zu gelangen. Einerseits versuchte er, die Empfindung und das Bewusstsein mit Hilfe eines psychologischen Verfahrens transparent zu machen, andererseits zielte er auf die allgemeine Erkenntnis ab, die diese vielen einzelnen Elemente in einem geschichtlichen Verfahren zusammenfassen kann. Nach meiner Auffassung hängt der vierte Teil der psychologisch-sinnlichen Betrachtungen (z. B. die Breslauer Ausarbeitung in Band XIX) beim mittleren Dilthey mit dem sechsten Teil der geschichtlich-systematischen Betrachtungen zusammen.

Der vorliegende Band XIX der Gesammelten Schriften schließt sich inhaltlich unmittelbar an den vorausgegangenen Band an, setzt die dort begonnene Edition der Vorarbeiten Diltheys zur Einleitung in die Geisteswissenschaften fort und verbindet damit den Versuch einer systematischen Rekonstruktion des von Dilthey unvollendet hinterlassenen Werkes. Dieser Text ist einerseits ein zentraler Bestandteil der editierten Manuskripte, aber andererseits ein ergänzungsbedürftiges Fragment. Diese Disziplin der Geisteswissenschaften von Dilthey versucht Menschen zu verstehen. Dilthey schrieb, dass die Erkenntnis der Geisteswissenscheften „eine Selbstbesinnung“ ist. Er interessierte sich am Anfang für die „Psychologie“. Laut Dilthey wird Psychologie als eine Wissenschaft definiert, in der man selber sich von innen erlebt und kennt. Das bedeutet, dass man in seinem Bewusstsein das gesellschaftlich-historische Spiel um sich merkt. Dafür müssen wir eine Psychologie für die Menschheit formieren. Dadurch kann man einen gemeinsamen Nenner der menschlichen Handlungen und Gedanken finden.